

実践報告

臨地実習指導者と教員の交流会を行って

—臨床指導者カフェの取り組み—

中澤洋子* 中島泰葉 作並亜紀子 塚本陽子 鈴木朋子
齋藤千秋 佐々木俊子 段 亜梅 笹木葉子

名寄市立大学保健福祉学部看護学科

キーワード：臨地実習 臨床指導者 看護教員

1. はじめに

看護教育において臨地実習は看護実践の場となる病院をはじめとする施設の中で、看護学生は看護職の一員として対象者にケアを行う。臨地実習の過程は学内で学んだ既習の知識・技術から実習の場の現象をアセスメントし実践することで、理論と実践を統合させていく。臨地実習の指導は教員と臨地実習指導者（以下、指導者）が担っている。近年、実習施設は患者構成の変容により、地域医療計画（厚生労働省，2017）に基づき、在院日数の短縮や病床機能の再編が本格化し、現場は看護業務過多の状態である。指導者もケアの実践や他の業務と並行して、学生の実習環境を調整するなど、多くの役割を持ちながら学生を指導している。

看護学の臨地実習指導体制は、大学が実習の具体的な到達目標を示し施設の管理者と指導者への説明を行う。さらに施設側はその施設の特色を踏まえた実習方法を大学に提示し、大学・施設双方が理解した上で実習方法を調整するため、双方の協力体制が不可欠である。しかし、実習に関する説明と調整以外に、指導者と教員間で十分に実習についての思いや考えを共有する時間がない現状である。教員も指導者と実習の打ち合わせを行う以外、実習中は学生指導にほとんどの時間を費やすため、指導者と交流を図る機会が少なかった。さらに指導者は交替勤務で時間的制約があり、研修などの機会を持たない限り指導者間の交流が図りにくい現状があった。施設によっては指導者研修がなく、指導者という立場で互いに交流できる機会が全くない指導者もあり、指導者と教員の交流の重要性を感じていた。そこで、指導者が学生指導上でのジレンマを、学生と指導者での話し合い互いの経験を共有する取り組み（南前，2002）を参考に、本学の実習施設の指導者、教員の交流と連携を図る目的で「臨床指導者カフェ」を開催した。本報告はその取り組みを述べていく。

2. 臨床指導者カフェの概要

平成28年2月に名寄市立総合病院看護部の提案により、市内病院の指導者と本学教員の連携を深める目的で「臨床指導者カフェ」を名寄市立総合病院主催で開催した。この臨床指導者カフェは地域で臨地実習をささえる情報や悩みの共有ができ連携の一助となった（木下・森田・今田・平野，2016）。そのため、継続が必要と考え、翌年平成28年度から本学主催で臨床指導者カフェを実施することとなり、平成29年2月10日に本学で開催した。臨床指導者カフェの内容は、臨床指導者と教員の混成チームで、オープンなフリートーキングを用いる「ワールドカフェ」の様式（香取・大川，2009）を取り入れ行い、実習指導や学生に関して率直に話せるように、テーマは「学生指導の困りごと解決の秘訣を共有しよう」とラフな設定にした。

表1 参加者の内訳

所属施設	参加人数
病院	12名
介護老人保健施設	1名
名寄市立大学（教員）	11名
計	24名

*責任著者 E-mail:y-nakazawa@nayoro.ac.jp



写真1 臨床指導者カフェプログラム



写真2 臨床指導者カフェのトーク内容



写真3 臨床指導者カフェの様子

臨床指導者カフェの対象は病院を中心とした本学の臨地実習施設とし、各施設の看護管理者に案内を送付した。参加者はインフルエンザのため1名欠席があり、指導者と教員合わせて24名の参加者だった(表1)。

臨床指導者カフェはグループでフリートークをするが、指導者と教員混合5人のグループとして5グループの構成とした。プログラムでは、グループ内の緊張を和らげ親しみを持てるようにアイスブレイクを用いて自己紹介し、その後1時間カフェトークとしてグループ毎に話し合った(写真1)。また、フリートークの内容を発表できるように“どこでもホワイトボード”に書き入れてもらった(写真2)。また、「お困り箱」として、事前にテーマに沿った各自の困り事を書いてもらいお困り箱に集め、フリートークで会話が途切れたときに会話のきっかけとして活用できるようにした。しかし、お困り箱はどのグループも使用せずにカフェトークは途切れることなく進んでいった。カフェトーク終了後、各グループの話した内容を発表してもらった。各グループの発表内容は、自分が指導していて困ったこと、指導している中で疑問に感じたことなど自分の経験を基に話していた。

3. アンケート結果

アンケートは本学倫理委員会の承認を得て、臨床指導者カフェ終了後に参加した指導者に実施した。

アンケート用紙の内容は臨床指導者カフェについて①～⑤を4段階SD法で調査し単純集計した(図1)。また、⑥は、今回のカフェに参加しての自由記載で調査した。その記述された意味内容で類似するものをまとめて集計した(表2)。

アンケート回収率は100%であった。アンケート結果から臨床指導者カフェは参加した指導者の9割が肯定的に捉えられ、他施設の指導者や教員との交流を通し、指導方法や悩みの解決ができたと考えられる。自由記載からは教員や他の指導者の理解ができたことや、実習指導の情報が得られ、関係性の構築ができたことが明らかになった。今後も交流する機会を持ち、実習での困難や苦勞を互いに理解し、指導や実践に役立つ内容を検討していく必要性が示唆された。今回は参加した指導者のみに調査をしたが、教員の参加者も多いことから今後は教員にもアンケート調査をしていきたい。

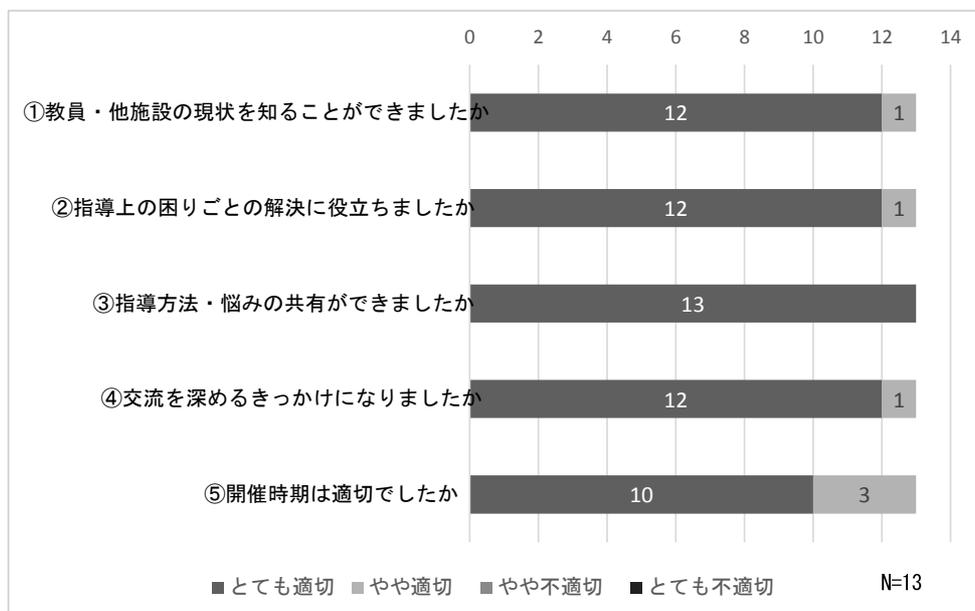


図1 臨床指導者カフェ 参加指導者アンケート

表2 ⑥自由記述の内容（複数回答）

指導者、教員と話せて楽しかった	6
指導者、教員と情報交換ができ満足した	4
他の指導者の困りごと苦勞が分かり、対策も共有できた	4
実習に携わる同士で関係を育めた	3
指導者として学習した	3
学生への新たな認識を得た	3
実習指導の励みになった	3
困りごとが解決した	1
今後も参加したい	1
院内研修に取り入れてほしい	1

4. おわりに

臨床指導者カフェは好評に終えることができた。今後も臨床指導者カフェは本学看護学科が主催で継続することとなった。次回は病院の指導者だけでなく、社会福祉施設の看護職指導者からも参加を募り実施予定である。

引用文献

香取一昭, 大川恒. (2009). ワールドカフェをやろう. 日本経済新聞出版社.

木下亜紀, 森田静江, 今田純子, 平野智美. (2016). 臨地実習を地域で支えるために—実習指導者と教員との交流にワールド・カフェを活用して—. 第47回日本看護学会ヘルスプロモーション学術学会抄録集, p322.

厚生労働省 (2017). 第7次医療計画と地域医療構想 医政局地域医療計画課 医師確保等地域医療対策室

http://www.mhlw.go.jp/file/06-Seisaku-jouhou-12600000-Seisakutoukatsukan/0000114063_7.pdf (検索日 平成29年8月)

橋本淳. (2014). 地域連携のためのワールドカフェ方式カンファレンス「岡・カフェ」の有用性の検討. 死の臨床, 37(2), 370.

南前恵子. (2002). 臨床実習指導者と看護学生の対話会の効果の検討. 日本医学看護学教育学会誌, 11, pp5-7